授業探訪「英語プレゼンテーション」

欲張りな授業

川﨑　晶子

1. 2010年英語必修新カリキュラムと英語プレゼンテーションクラス

全カリ英語は、1997年度「コミュニケーション能力と異文化対応能力の育成」を理念として発足、いくつもの改良を重ね続けてきた。2006年には、大幅な改革が行われ、COC、LCCという2つのコースで、週4日8単位1年次集中、週2回同じ担当者が持つペアクラスを含む特徴のあるカリキュラムを展開した。しかし、2010年度には必修英語の単位減少に伴い新カリキュラムに。1年次必修はコース別やペアクラスを廃止しての週3日6単位、1クラス8人や20人（英語eラーニング以外）という徹底した少人数教育を実施し、2年次以降の継続的な英語学習を推進するために言語副専攻制度も開始した。1年次の必修は、前・後期履修の英語プレゼンテーション（P）と英語ディスカッション（D）、半期履修の英語ライティング（W）か英語eラーニング（E）を週3回のクラスで履修という形になった。

2010年度英語必修新カリキュラムでは、「世界の状況を正しく認識し、各自が生まれ育った文化や社会環境を正確に受け止め、それらを基にして自らの意見を積極的に発信していく能力が必要とされる…グローバル社会に対応した、総合的かつバランスの取れた英語コミュニケーション能力を育成すること」（履修要項より抜粋）を目的として授業を展開している。Eで個々の学生にあった方法でリーディング力とリスニング力を強化し、PDWの3種類の発信型の授業で、情報を得、意見交換をし、自らの意見を英語で発信していく能力を積極的に伸ばす仕組みになっている。その中で、Pは中核となるクラスである。読み、書き、聞き、話す力を駆使して、身近な事から、社会問題、異文化理解などの話題について、事前に情報を得、授業ではその情報・意見の交換をし、口頭発表の組み立て方を学びながら、自分の意見を口頭で発表することを繰り返す。

必修英語は、学部ごとの能力別編成になっている。レベルはS、A、B、Cの4レベル、前期・後期、それぞれ入学時と前期末のGTECテストの結果でクラス分けされる。全学の1年次が対象で、1週間に約230のPクラスがあることになる。この文章は、そのたくさんあるPクラスの担当者の一人が書いているほんの一例である。担当者は自分の担当した学部の学生の特性、レベルなどを考えながら、統一シラバスに基づき13週間の教案を考える。統一シラバスは英文4ページ程度で、目的、教材、教授法、評価方法についての指針が英語で詳しく書かれている。授業は英語で行われるのが原則である。2010年度は、統一教科書として*Speaking of Speech*というプレゼンテーション・スキルの教科書が指定された。教科書は1冊を1年間使用するため、前期は前半のプレゼンテーションの大枠、後期は前期内容を含みながら後半のより詳細なプレゼンテーションの組み立てを学ぶ内容となった。加えて、英語教育研究室のプレゼンテーション

委員会が制作した補助教材案が配布された。補助教材案は、連携を図ったディスカッションクラスのトピック、後期だとLanguage, Design, Globalization, Media, Human Rights, Gender の 6 トピックに関連した新聞記事や論説などが、上級、中級、初級それぞれ 3 編ずつ選ばれ、それぞれに関して 4、5 個の問いがつけられている。担当者は、トピックをいくつか選び、補助教材、自分の選んだ記事などを利用し、プレゼンテーションのスキル習得と組み合わせながら 13 週の計画を立てた。

2. 後期プレゼンテーションクラス、13 回の授業の流れ

私の後期担当したクラスを紹介する。B レベル、20 人登録で始まった。テキストの前半の復習を織り交ぜながら、各自がテーマを見つけそれについて調べ、考え、アウトラインを作り、まとまったプレゼンテーションができるようになることを目標とした。特に重視したのは、1）雛型を利用しながらプレゼンテーションを組み立てられる、2）自分の調べたこと・考えたことをきちんとまとめ、図表や写真などの視覚資料を使って伝える工夫ができる、3）書いたものを読むのではなく、アウトライン程度のメモを見ながら話せるようになること、である。3）まで到達した学生はそれほど多くはない。

13 週を 3 部に分けた。1）プレゼンテーションの構成やコツを学ぶ、2）と同時に、リーディングで情報を得、グループの仲間とのやりとりなどのプロセスを経て、自分の興味のあるテーマを見つける、3）選んだテーマについて調べ、何を言うか考え、自分のプレゼンテーションを準備する、4）全員の前でのプレゼンテーションを行う、の 4 段階の作業を、内容を増やしながら、3 回繰り返した。第 1 部は、Language 関連の内容で、プレゼンテーションのアウトラインにそって 1 つのプレゼンテーションをすること、第 2 部は、Globalization 関連の内容で、統計や図表写真などを加えて 1 つのプレゼンテーションにすること、第 3 部は、Human Rights や Gender 関連の内容で、皆に伝えたいメッセージも明確に加えて 1 つのプレゼンテーションにすること、を目的とし、3 分、4 分、6 分と発表時間を長くしていった。第 3 部の内容は難しいと感じる学生が多かったので、日本語の資料も追加、世界人権宣言の日英語での抜粋を資料として渡したり、「『どぼじょ』増えてます」（朝日新聞記事。土木系女子、土木業界で活躍する女性の話題）などの日本の新聞記事を紹介し、身近な話題、小さな気づきがプレゼンテーションのテーマを考えるもとになることを示した。

意欲的な学生は、小さなきっかけからそれについて調べ、クラスの仲間が感心するような新しい情報を紹介しながら、テーマを自分なりにまとめ意見を言うなど、真剣な取り組みの結果を見せてくれた。英語を話すのは自分であること、自分が話したいことがあれば、それをうまく伝えようと努力することになること、という自然な学習プロセスもわかってくれたようであった。

英語のクラスは要領よく、という学生もいる。そういうタイプの学生は、今回は、プレゼンテーションの雛型があることで簡単にプレゼンテーションができると感じた面があったようだ。短くはあるが、構成通りに話をすすめ、要領よく写真や図を入れ、英文法の間違えが各所に見られても、元気よく人前で話していた。人前で臆せずに話せるようになるという面では 1 つの目標を達成していると思う。

一方、準備万端型の学生は、たくさ

んの事を調べ、それをたくさん詰め込んだ文章を準備し、覚えきれずにそれを読み上げることになってしまう。本人もそれはよいことではないとわかっている。私も、聞いている人たちを見て、ジェスチャーを使って、スクリーンを指さして、など、テキストにコツとして絵付きで書いてあるようなことを実際にやるようにとすすめるが、どうしても最後は小さな紙を取り出してそれを読み始めてしまう。読まないでやろうとしてもやれないタイプなのかもしれない。内容はよく考えられていることが多い。今できなくても、場数を踏めば上手なプレゼンテーションができるようになると思う。

20人クラスになり、一人一人の得意不得意がよく見え、それぞれにあった対応ができるようになった。

個人個人がよく見えると、評価がかえって難しくなる。プレゼンテーションだから原稿を読むのは禁止と言っても、どうしてもできない学生の心理や背景がわかってくると、甘くなりそうになる。明瞭で公平な評価をする努力が必要である。3回のプレゼンテーションでは、学生にも私が使う評価シートを渡し、仲間の評価をしてもらった。1回目、2回目の評価は、他の人の評価を切り取って本人に渡した。そこで、どういう項目が評価の対象になっているか、聞き手にはどういうところが印象的だったかなどがわかる。平常授業では、毎回宿題シートや授業中のワークシートを集め、それを記録・集計して最終評価に反映させた。授業を休んだり宿題を出さねば、自ずと点が低くなる。

どうにか計画通りに授業をすすめたが、やれなかった事は山ほどある。

3. プレゼンテーション・スキルと、英語力と、発信内容の充実と

発信型の授業では、発信スキルの習得と、英語力の向上、発信内容の充実の3つを満たしたい。が、どうしてもどこかが手薄になってしまう。

プレゼンテーション・スキルに関しては、今回はテキストがあり、それを後期の最後には全部カバーし、また実際プレゼンテーションを3回やることで、基本的スキルの習得はかなりできたのではと思う。

英語力の向上が、難しい。よい英語を話そうと思ったら、よい英語を読み、そこでの文のいいまわしなどを真似していくとよい。ただ、リーディングは宿題にしたため、実際しっかり読めているのかの確認が十分できなかった。前半でパラグラフごとに要約を書く作業を入れ、文章の流れを読み取るコツは伝えたつもりだが。また、各自が選んだ素材を読んでくるという課題の場合は、グループで他の人に自分の読んだ物を説明しなくてはならないので、ある程度は読んできているのだが、それが正しく読めているかの確認はできない。また、プレゼンテーションの場合、内容を考えメモを作りそれをもとに発表をするというのが前提であるので、アウトラインのチェックなどの他は、書いてきた文章を添削する機会はほとんどなかった。その為、よっぽど意味が通じないようなことがなければ、妙ないいまわしや表現を細かく直さずにすすめることになる。少人数になったため、個々の学生の英語の間違いの癖などがわかることがある。それをうまく見つけ出し、FAQの発想で、よくある間違いリストとそれに対応するプリントなどを準備しておき、個人的に課題を渡して指導すればよいのではと思う。今後の課題である。

最後の発信内容の充実は、大学での英語学習の場での大きな動機付けになり、重要なものだと思っている。例えば、

何かについて簡単な説明を準備するように言うと、英語のウィキペディアをそのまま書き写してきてそれでよしとする学生が必ずいる。鵜呑みにせず、いくつか調べて、出典も明記して、自分のまとめ方でまとめるように口を酸っぱく言ううちに、丸写しは無くなっていく。また、リーディングから自分のテーマを見つけるという自主的な作業ができない学生もいる。読んで、知って、考えて、言って、というプロセスを小さな例でも示していくうちに、それができるようになっていく。そして、他の人との視点の違いを見つけ、それぞれの独自性に気づいたりもしだす。また、プレゼンテーションのトピックは日本語で日常話したりしないような事柄も多く、英語の宿題だからと読んだり考えたりすることで、社会の動向、文化的背景などに気づくことも多い。発信内容の充実は私自身最も工夫できるところだと感じている。いかに英語を学ぶことが、自分を知ることであり、世界の中での自分のあるべき姿が見えてくる所であるかということを感じてほしいと思いながら、授業をすすめている。

発信内容の充実と英語力向上とのバランスが難しいが、対面授業の場合は、担当者と学生、及び学生同士のやりとりで、実際のコミュニケーションを行いながら、何を表現したいかを自主的に考える場を作れる。自分の意見を持ち発信することの大切さが実体験できるような英語教育を行いたいと思っているが、試行錯誤がまだまだ続く。

かわさき　あきこ
（本学異文化コミュニケーション学部教授）